

鳳来寺村峯の某の家は、おそろしく古い家で、何代前に建てたことか想像も出来ぬほど煤に埋もれていたと言う。どうしたわけかこの家には、昔から狸が棲んでいるという噂があった。姿を見せるとは言わなんだが、夜など客が炉に向って主人と話をしているとき、ときおり、ばさりと変な音がして、急に燈火が暗くなることがある。その時は自在鍵の上から、何やら箒のようなものが下がっている。それが狸の尻尾だとも言うた。それでいて格別その狸が悪いことをすると聞かんだが、ある時若主人が、近所の噂を気にして、狸退治をすることにした。炉に青杉の葉を山と積んで、どんどん燻し立てると、さすがの古狸も閉口したと見えて、壁から壁へさっと尾を打ちつけては、天井から天井を遁げ廻る音を聞いたが、ついに取り押さえることは出来なんだそうである。しかしそのこと以来狸は屋敷を遁げ出して行ったらしく、それらしいこともなかったと言う。あるいはなおいるなどとも言うたが、十数年前家を取り毀してしまったと言うから、いずれにしてももう何処かへ宿替えしたことであろう。

北設楽郡本郷の、某という酒屋の土蔵にも、狸が棲んでいたと言うた。永いこと酒を呑んで、腹のあたりが赤い色をしている。それでその土蔵を取り毀した時には、たくさんの同類とともに、次から次へ遁げて出たとも言うた。

長篠の城址の近く、寒狭川と三輪川の渡合（どあい）にあった長盛舎という運送問屋の荷倉にも狸が棲んでいるともっばら言うた。その荷倉は久しい前に取り毀してしまっただが、おそろしく長い建物で、中へ入ると、一方の端は見かすむほどだったと言う。如何にも狸が棲みそうだと言うたものもあった。その狸が、時おり近所へ出かけて、人を化かすとも言うたが、時おり蔵の中で乱痴気騒ぎをやって、その太鼓や笛の音が川を越した乗本（のりもと）や久間（ひさま）まで手に取るように聞こえたそうである。

この荷倉の話もそうであるが、古い大きな建物の形容に、狸が出そうだと一般に言うたことである。

これで狸の話もほぼ材料が尽きるから、八畳敷の昔話をして、そろそろ終わりとする。自分らが聴いた昔話の中で、狸を扱ったものは、文福茶釜にかちかち山ぐらいなものであったが、別にきんたま八畳敷というのがあった。この話は二通りあったようで、子供の頃たびたび聴かされたものであるが、話が下品とでも思ったせいか、詳しく記憶せなんだのは遺憾である。

まず一人の博奕打ちがあって、どうしたわけだったか狸の化けた賽ころを手に入れる。その賽ころは男の言う通りに目が出るので大分具合がよい。それでいろいろなものに化けさせたが、ある時隣家に婚礼があって、何か祝いものをせねばならぬが生憎何もなし。そこで賽の目に鯛と出ると言う、見事な赤鯛

になる。男がそれを持って隣家へ呼ばれて行く。鯛はいろいろ誉め言葉を受けて、やがて台所へ下げられ料理の段になって、俎に載せられると、急に跳ね出して、とうとう床下へ跳び込んでしまう。そんなわけで男が無理な注文ばかりするので、狸が愛想を尽かす、いよいよ別れる段になって、八畳敷を見せることになる。そして立派な青畳を敷き詰めた座敷になるが、男が見惚れて煙草の吸殻を落とすので、じじと音がして座敷はたちまち消えてしまって、男は一人広い野原の真ん中に坐っていた。と言うような筋だった。

今一つは、一人の小僧が道でしわくちゃになった、袋のようなものを拾う。触ると温かで、柔かでもじゃもじゃしたものである。その袋が、前の話と同じように、小僧の言うままいろいろなものになって見せる。最後に小僧が八畳敷と言うと、見事な座敷になったが、中に一ヶ所変な括りめのようなところがある。小僧がそれを気にして、針の先でちょっと突くと、じじと音がして元の毛だらけの変なものになってしまって、もう役立たなんだと言うのである。